

黄檗宗大本山 萬福寺 七堂伽藍



禅宗「黄檗宗」の大本山

江戸初期に渡来した中国僧隠元によって寛文元年(1661年)に開創。境内には中国式の巨大な伽藍が建ち並び、異国情緒にあふれている。中国風精進料理「普茶(ふちゃ)料理」や唐韻で読まれるお経「梵唄(ぼんばい)」など、当時の文化にも触れることができる。黄檗ほていまつり(毎月8日(2月・8月は休み)、手作り市など)



三門重文

三間三戸。重層の楼門造りで、左右に裳階(もこし)、山廊があります。大棟中央に火焰付宝珠があります。正面の額「黄檗山」、「萬福寺」は隠元書。ここを入れば脱俗の清浄域です。円柱を用いた建物は、三門・天王門・通玄門・舍利殿・寿蔵だけです



総門重文

中央の屋根を高くし、左右を一段低くした中国門の牌楼(ぱいろう)式を用い、漢門とも呼ばれました。中央上部裏面には円相が型取られています。これは風水的モチーフの一つ、「白虎鏡」です。額「第一義」は第5代高泉の書。この額字には高泉和尚が何度も書き改められたという逸話があります。



十八羅漢像

従来の鎌倉、室町の十六羅漢に、「慶友(けいゆう)尊者」と「賓頭蘆(びんずる)尊者」を加え、十八羅漢とした明代寺院の形式を受け継いでおり、中国に現存する大雄宝殿と同様です。写真は羅睺羅尊者(らごらそんじゃ)です。



歇山重檐式(けっさんじゅうえんしき)

中国・韓国・日本で宮殿や寺院を建立する場合の最も基本となる建築様式は歇山重檐式と呼ばれます。外見上、二重構造に見えますが、下方の檐(屋根)は装飾であり、内部は単層構造です。



釈迦如来坐像(中尊)

京大仏師兵部作、寛文9年(1669)造立、木造、像高250cm。当寺の本尊。摩訶迦葉(まかかしょう)と阿難陀(あなんだ)の両尊者が脇侍として安置されています。



蛇腹天井(じゃばらてんじょう)

黄檗天井ともいい、龍の腹を表しています。本堂のほか、法堂、開山堂の主要建造物の正面一間分の軒下の垂木はこのように丸く、かまぼこ型をしています。中国にも同様のものがあり、「檐廊(えんろう)」と呼びます。



大雄寶殿(だいおうほうでん)重文

萬福寺の本堂であり、最大の伽藍。日本では唯一最大のチーク材を使った歴史的建造物として、大変重要かつ貴重なものです。本尊は釈迦牟尼佛。両脇に十八羅漢像を安置。大棟中央に火焰付、二重の宝珠。正面入口は魔除けとされる桃の実の彫刻を施した「桃戸」、左右に円窓。上層の額「大雄寶殿」は隠元書。下層の額「萬徳尊」は木庵書。本堂内部須弥壇の上の額「真空」は明治天皇の御宸筆。



齋堂重文

堂内に緊那羅王菩薩を祀っています。高脚飯台と腰掛があり、本山僧衆の食堂です。表には鬼界の衆生に施す飯を乗せる生飯台(さばだい)があります。前方入口の前には、「開梆」と「雲版」があり、食堂を禅悦堂ともいいます。聯・額ともに木庵の書



法堂(はっとう)重文

禅寺における主要伽藍のひとつで説法を行う場所。内部には須弥壇のみを置きます。上堂や住持の晋山式などに使われます。須弥壇上の額「法堂」は隠元の書であり、黄檗山では唯一の楷書による大書です。



開梆(かいぱん)と雲版(うんぱん)

黄檗清規には、飯梆(はんぼう)と記されています。また魚梆、魚鼓とも呼ばれます。叢林における日常の行事や儀式的の刻限を報じる魚の形をして法器のことです。

雲版は、朝と昼の食事と朝課の時に打つものです。青銅製。





山堂重文

三門をくぐってすぐ左に曲がると、通玄門という朱色の門があります。それをくぐると氷裂文の石畳(同じ形の石はまったくない)、白壁・卍の勾欄・白砂などが目前に広がり、真正面に開山堂があります。

ここに黄檗開山隠元禅師をお祀りしてあります。毎月1・15日には山内の僧が祝拝し、3日には開山忌を営みます。祥忌の4月3日には、他山からの僧を招待して厳粛に執り行われます。



通玄門重文

開山堂の正門。この門は重要な結界の一つであるため、円柱となっています。奥深く玄妙なる真理＝仏祖の位に通達する門。



隠元禅師像

范道生作、寛文3年(1663)造立、木造、像高161.7cm。造立時は白払子を手にしていたようですが現在は失われています。実物の毛髪・髭が植えられ、しわなども克明に彫られて、写実的な像です。禅師の生前に師の古希を祝して造られた寿像です。



普茶料理(ふちゃりょうり)とは、本宗の開祖隠元禪師が中国から伝えた精進料理で、「普茶」とは「普く(あまねく)大衆と茶を供にする」という意味を示すところから生まれた言葉です。

中国文化の香りがし日本の山野に生まれた自然の産物を調理し、すべての衆が佛恩に応え報いるための料理です。席に上下の隔たりなく一卓に四人が座して和気藹藹のうちに料理を残さず食するのが普茶の作法です。

禅宗では「五観の偈(ごかんのげ)」という食事の前に唱えられる偈文があり、食事をいただく事も修行のうちのひとつです。その事を踏まえ、素朴・幽遠な禅味のある三百数十年の伝統と風味をご賞味ください。

＜五観の偈＞

一つには、功の多少を計り彼の来処を量る

(この食事が、多くの人々や生命に支えられていることに感謝します。)

二つには、己が徳行の全闕と忖って供に応ず

(自らの行いがきちんとしているかどうかを反省して、食事をいただきます。)

三つには、心を防ぎ過食等を離るるを宗とす

(食事の量や内容にかかわらず、正しい心で残さずいただきます。)

四つには、正に良薬を事とするは形枯を療ぜんが為なり

(食事は身と心の健康を保つための、一番の薬です。)

五つには、道業を成ぜんが為に應にこの食を受くべし

(自分の仏道修行、目標、責務を成し遂げるための食事です。)